

IV-31 都市環境と住民意識

神戸大学工学部 正員 枝村俊郎
建設省 正員 池尻勝志
神戸大学大学院 学生員 ○中村啓子

1. はじめに

住みよい生活環境をつくり出すうえに、都市にある種々の施設の整備の度合と総合環境指数との関係を知ることは望ましい。この関係については、我点法と呼ばれるいくつかの案が出されているが、これらは次のような欠点を持っている。オ一に住民の意識構造については、まったく考えられていない。オ二に、ある地域における生活環境の問題点は何かということと、あいまいにしてしまうことである。

以上のことを踏まえて、本研究は住民の意識中心に、都市の施設の整備の度合と環境の総合評価との関係をみるものである。分析手法としては、カテゴリー表現されたアイテム間の関連の度合を示す指標としてのクラマーのコンティンジェンシー、アイテム、カテゴリーおよび個体のグループとしての近さと分析する林の数量化Ⅱ類、一

組の分類値で表現された指標と他のアイテム、カテゴリー化された要因で説明する林の数量化Ⅱ類の3手法を用いる。

2. 用いた資料

大阪府知事室公聴課によって行われた「昭和45年度府政に関する世論調査」結果を用いた。この調査区域は大阪府を除く府下全域であって、選挙区を単位とし100地点、181サンプルが得られているが、後に予定している大阪府のフィジカルデータとのつき合わせのためフィジカルデータの得られぬ地区のみを分析の対象とし、725サンプルを使用した。分析に用いた要因は表-1に示す。なお、数量化Ⅱについては、神戸市企画局調査部「市政調査No.11」の結果を用いた。これは32地点、3723サンプルが得られている。

3. クラマーのコンティンジェンシーによる分析結果

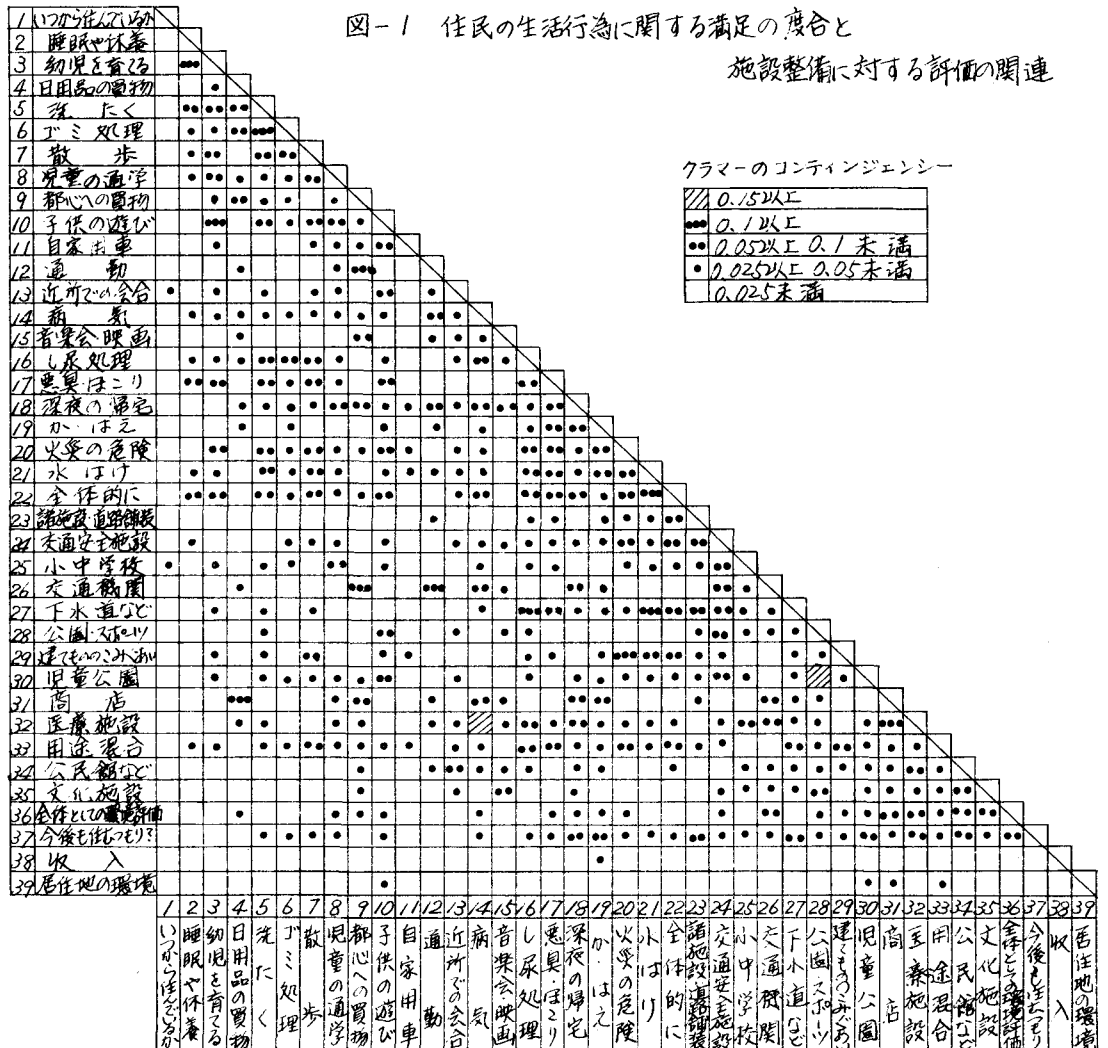
No.	要 因
Q-1	現在の住まいに 1. 1つごろから住んでゐるか
Q-2	1. 睡眠・休養 2. 幼児を育てる 3. 日用品の買物 4. 洗たく 5.ゴミ処理 6. 散歩 7. 児童の通学 8. 都心への買物 9. 子供の遊び 10. 自家用車 11. 着がえなど 12. 通勤 13. 近所での会合 14. 病氣 15. 音楽会・映画 16. 排泄処理 17. 虫臭・ほこり 18. 深夜の帰宅 19. かやばえ 20. 火災の危険 21. 水はけ 22. 全体的に
Q-3	1. 道路(巾負) 2. 道路(舗装) 3. 交通安全施設 4. 小中学校 5. 保育所 6. 幼稚園 7. 交通機関 8. 下水道など 9. 郵便局など 10. 保健所 11. 図書館 12. 公園・スポーツ 13. 消防施設 14. 建てもののさみぐみ 15. 児童公園 16. 商店 17. 医療施設 18. 用途混合 19. 公民館など 20. 文化施設 21. 警察署など 22. 街灯
Q-4	全住としての環境
Q-5	引続き現在の住居に住み続けるか
F-1	回答者の性別
F-2	回答者の年齢
F-4	回答者の学歴
F-6	回答者の職業
F-7	家計支持者の職業
F-8	住居の種類
F-10	上流・中流・下流?
F-12	流入
D-2	居住地の環境(判定)
Q-2, Q-3, Q-4	はその満足度の程度で答える。

F-1 → F-12はフェイス項目
D-2は調査員の判定による

表-1 アンケート調査内容の概略

生活に関する住民意識 Q-2 と施設整備に対する認識の度合 Q-3 とは ある程度の関連が認められることはいえよう。特に興味深いのは「水はげ」と「全体的」の関連であろう。また「幼児」と「休養」、「下水道」と「尿処理」、「建てもののこみごあい」と「火災危険」の各関連は 常識的ではあるが興味深い。「商店」と日用品の買物「都心への買物」と「通勤」および「交通機関」の関連は それぞれ実際の設備がそのようになっているためであろう。この結果を図-1 に示す。

ここに結果は示していないが フェイス項目が生活環境意識項目 Q-2 と何ら関連を示さないこととはむしろ予想以上であった。また フィジカルデータと生活環境意識項目 Q-2 における無関連も予想以上であった。



4 杯の数量化Ⅲ類による分析結果

Q-2 (3, 5, 7, 8, 9, 12, 16, 17) Q-4, F-1, F-2, F-7, F-12 間での分析結果を示す。第一軸とし

てRANGEの大きいものから示すと“総合評価”(0.0628)、“児童の通学”(0.0472)、“子供の遊び”(0.0470)、“日用品の買物”(0.0421)、“悪臭・ほこり”(0.0407)、“都心への買物”(0.0403)、“ゴミ処理”(0.0387)以下“し尿処理”“通勤”の順であり、フェイス項目のRANGEは以上のものと比べれば、すべて0.0160以下であり小さい。オニ軸に関してもフェイス項目は“職業”がやや高いほかごく小さい。オニ軸に関してRANGEの大きい順に並べると、“日用品の買物”“ゴミ処理”“都心への買物”“総合評価”“し尿処理”“児童の通学”“通勤”“職業”“子供の遊び”“悪臭・ほこり”となる。各項目について1X値、2X値をプロットする。項目の中の一部を図-2で示す。フェイス項目とのぞき他の項目も図-2に見られる動き

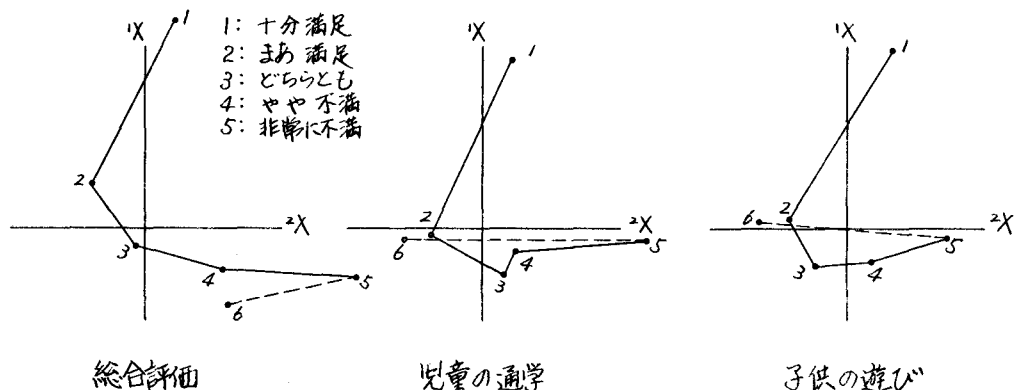


図-2. 数値1X, 2Xの分布

とする。図より軸の解釈をすると、オニ軸は快適満足軸、オニ軸は“非常に不満”と“DK”が対極的な位置を占めることから関心無関心軸ということができる。またオニ軸はRANGEの大きさから、利便軸という解釈もありうる。以上より生活環境に不満を感じている人は環境に対する意識が強いといえよう。フェイス項目についてみるとRANGEは小さいが、職業については“専門技術”“管理”は1X軸上方(満足方向)“技能工・生産工”“運輸通信”“事務”が1X軸下方(不満方向) 2X軸については“その他”が右方(不満・有関心)“無職”“サービス”が左方(無関心)となっている。また収入については1X軸上方に増大している傾向があり、無関心方向には“年収不明”逆方向には“年収不定”があるがいずれにしてもそのRANGEはかなり小さい。性別では女性の方が1X軸に関してやや上方であるが、そのRANGEは非常に小さく、性別により住民意識の違いは大きく認められない。

次に調査地点別に サンプルの得点 $Y-2Y$ をプロットする。その一部を図-3に示す。地区によって点の散らばり方に特徴が見られ、これは各地区の性格をある程度特徴づけるものと思われる。住民意識が各地区により固有の特徴を見せているとすると、その地区のフィジカル

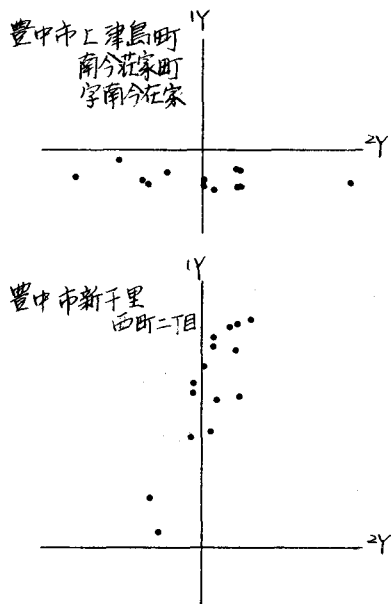


図-3 数値 $Y-2Y$ の分布

な環境とのつき合わせにより それを明らかにすることかできると思える。

続いて行ったQ-3, Q-4の分析結果についても 上に述べたこととほぼ同じことか見える。Y-X軸間での各項目での動きは 図-2と似た動きであり、またY-Y軸でも同じことか見えるので略す。

5 林の数量化Ⅱ類による分析結果

Ⅱ類による分析によって、一般住民の環境評価について 幾つかの可能な要因を合成した場合においてどのような要因が環境評価において重要であるか、またそれらの間の相対的なウェイト付けも可能となるであろう。

神戸市および大阪府のデータによる解析結果は不成功であった。図-4に神戸市のデータの判別ヒストグラムを示す。この時 要因としては用途混合率、容積率、公営特定施設、日用品販売距離、医療施設数、公園到達距離ととり、相関比 ≈ 0.5 となっている。図より、分離の度合は完全でないが、ある程度の傾向は読みとれるといった程度であろう。

大阪府のデータについても同様である。例えば要因として 学歴、居住環境、住居形式、人口密度、小学校通学距離、公園広さ、建ぺい率、風俗営業 とすると相関比 ≈ 0.442 である。フェイス項目が環境評価とあまり関係しないであろうことは前の二つの分析手法からも見られるが、この解析からも明らかである。

この解析が不成功の理由としては 一つには要因間の独立性の問題 一つには対象地区が広いにめ

に 総合環境評価と、その他の要因が平均化されてしまったためではないかと思われる。従ってⅡ類については 大阪府、神戸市といった大きな地区を対象とするのではなくいくつかのゾーンに分割してから使用したほうがよいかも知れない。

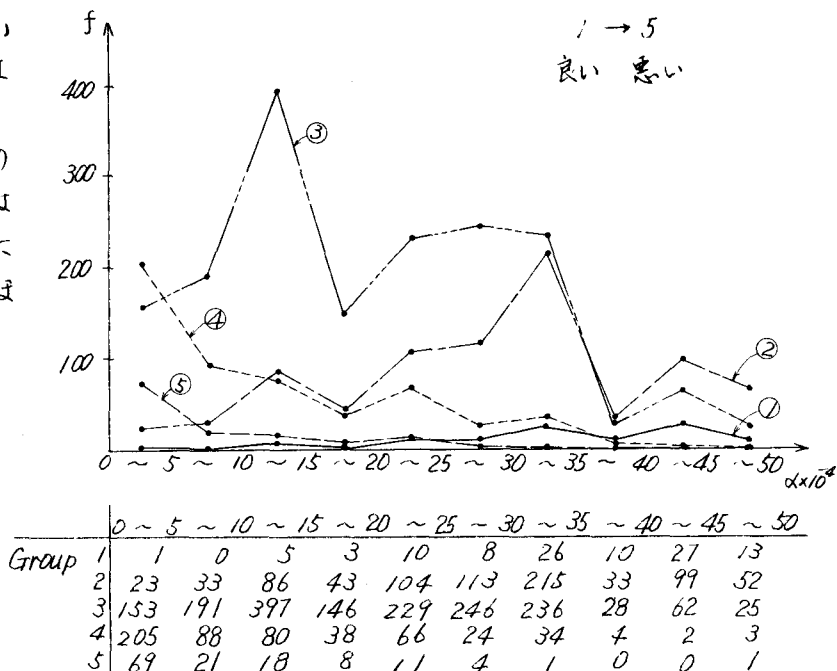


図-4 神戸市における判別ヒストグラム